A study of Will You Please Be Quiet, Please? by Raymond Carver

Setsuko KIKUCHI

Abstract

The theme of Will You Please Be Quiet, Please? will be examined in this paper, following Carver’s earlier period of life, in adversity. The struggle for critical and popular acclaim was long, painful, and sometimes hopeless. Carver married young and had two children before he was twenty. Caring for them, he earned money to support his family, yet the family constantly struggled financially, the Carvers twice declaring bankruptcy.

John Gardner and Gordon Lish played a great role in the birth of a short-story writer of the twentieth century. The former taught Carver how to write a concise sentence and the latter carried the story, “Neighbors” in Esquire which gave Carver a clue to rise in the world as a short-story writer.

In this story, with the Stones on vacation, the Millers, their neighbors assume the responsibility of looking after the plants and cat in their apartment. The Millers show no regard for privacy, opening cabinets and drawers and even trying on their neighbor’s clothes. Through ridicule, Carver suggests both unhealthiness of the sexual relations between the Millers and inadequacy of seeking fulfillment solely outside of oneself.

In “Will You Please Be Quiet, Please?”, the title story, Ralph Wyman, the protagonist argues with his wife’s adultery, leaves and gets drunk, gambles, is punched out by a mugger, and then, returning home, has sexual intercourse. Silence involves lovemaking, reconciliation and evolution. Carver depicts an ordinary couple fallen into a sudden pitfall in life.

The narrator of “Night School” is broke, unemployed, out of school, stuck at home with his parents, his marriage having just fallen apart. This situation is typical of Carver’s stories. That is ‘Carver Country’. “What is it?” and “Sixty Acres” have the same situation.

With Carver’s first collection of stories, Will You Please Be Quiet, Please? in his earlier period of writing life, he breathed new life into the American short stories and recognized master of his own writing style. Carver showed us humor, tragedy, a sense of loss and uneasiness that dwell in the hearts of ordinary people in the 1970s; his stories are classics of our time.

Key words: adversity, a short-story writer, John Gardner and Gordon Lish, his own writing style, ‘Carver Country’

キーワード：逆境、短編小説家、ジョン・ガードナーとゴードン・リッシュ、小説作法、‘カーヴァー・カントリー’
はじめに

レイモンド・カーヴァーにとって初めての短編集である『願むから静かにしてくれ』（Will You Please Be Quiet, Please?）は1976年にマグローア・ヒル社から出版された。彼はそれまでに全部で三冊の詩集を発表していたが、大手の出版社からこの短編集を出すことによって、作家としての大きな第１歩を踏み出すことになった。この時カーヴァーは38歳であったが、カーヴァーが作家として自立するまでの道のりは、決して平穏なものではなかった。

1960年代後半、70年代の生活苦という逆境から、短編小説家レイモンド・カーヴァーが誕生するまでの経緯をたどりながら、処女短編集『願むから静かにしてくれ』、特に表題作『願むから静かにしてくれ』、「隣人」（"Neighbors"）、「ナイト・スクール」（"Night School"）などの作家として転換期となったいくつかの作品に焦点を当てる。後期の円熟期に入る前、初期の時代にカーヴァーが追求したテーマ、小説作法、「カーヴァー・カントリー」を考察する。

I 逆境と短編小説家誕生

カーヴァーは1938年アーカンソーに生まれ、ワシントン州やマキシに育った。父親はその間で働き、母親は割引やウェイトレスの仕事をしていったという。アメリカの地方都市の、典型的なワーキング・クラスの家庭である。しかしこの時代にはアルコール依存症の傾向があり、その家庭生活は経済的にも精神的にも決して安定したものではなかった。

そのような生活の中で、どのようにして彼が文学に心を惹かれていったかは不明だが、自分は少年時代を描いた彼の多くの著作からも想像がつくように、彼の関心は物議を醸し上げるの安らかの間を大きく揺れて動きながら、何か永遠的なものを激しく欲求していたは疑いがないように思われる。

彼は高校を卒業すると半年間、父親と同じ製材所で働き、当時16歳のマリアン・バーグと結婚をして（その時には彼女はもう妊娠していた）、故郷の町で出て行った。そしてその12月には娘が、翌年の10月には息子が生まれる。

高校を卒業したばかりの彼は、妻と二人の子供を抱えてカリフォルニアに住み、生活のために様々な短期の仕事を続けながら、チコ州立大学の学生となって、ついに念願の創作の勉強を始める。

早婚のカーヴァーが二人の子供の育児や、生活の維持に悪戦苦闘をしていた。アメリカの60年代後半は、プロブックパーサーやヴェトナム反戦運動、フェミニズム運動などの急進的な政治運動が活発になっていった時代であったが、豊かな社会、自信に満ちたアメリカ、世界中の人々の憧れであったアメリカの姿は消えて行き、その代わりに希望を喪失したアメリカが浮かび上がってくる。

カーヴァーは、ヴェトナム戦争が悪化した60年代半ばに精神形成期を迎えたのではなく、すでに20代半ばを超えていた。7年かけて大学を卒業したカーヴァーは、アイオワ大学で小説の創作を教えていたが、妻も大学の運動クラブの食堂で働いていたため、子供の世話や膨大な洗濯などの家事に分担し、働き動けりと、生活苦から脱出せない絶望の日々を送っていた。

生活苦の中で、時間との競争で創作活動をしていたため、自由に行えるのは細切れの何時間かであり、そのような困窮した状況下で長編を書くのは不可能だったとも言っている。それでもまだ20代のカーヴァーは、妻とともに夢を追い続けていた。一冊懸命に書き、正しい行いに徹していれば、いつかは報われるのだ、「善意、誠実さ、我々はそれを立派な実徳だ」と信じていたという。しかし、カーヴァー一家は二度の破産宣告を受け、その信念はもろくも崩れ去る。

前述したように若くして結婚し、子供たちを養育しなければならない状況下にあり、時間的にも経済的にも困りがなかったカーヴァーは、『私の書くものがどのような形式を取りるか』ということは、そのような周りの状況によって
二人は恩師

1959年21歳のとき、生活苦に喘いでいたカーヴァーが、チコ州立大学の作業教室で出会ったのは、まだ不遇時代にあった小説家で、その大学で教鞭をとっていたジョン・ガードナー（John Gardner—私の出会った最初の本物の作家、とカーヴァーは言っている）で、ガードナーは短編小説家レイモンド・カーヴァー誕生に、非常に強い影響を与えることになった。ガードナーは私に小説というものの持つ「高潔さと正直さ」を教えてくれ、さらに、週末にカーヴァーが書くことのできる場所として、ガードナーのオフィスを提供もしてくれた、と彼は感謝の気持ちを込めて述べている。33

カーヴァーの文体の特徴的な核を形成しているのは、極度に抑制した文章を書くように強く勧めたのはジョン・ガードナーである。「自分の言いたいことを語り、それを含むべく少ない数の言葉で語る方法を、彼は私に示してくれた」43。このガードナーの教えを、カーヴァーは従来にして受け取ったという。教師として一流であったガードナーは、長い文章を書く時間のなかかったカーヴァーにとって救いとなり、彼に簡潔な文章で短編小説を書く自信を与えたのである。

さらにガードナーはカーヴァーに「日常の会話で使っている言葉、生活の中でピースにしている言葉を使って物を書くことの重要性」53を叩き込んだ。ひたすら育児と生活に追われ続けていたカーヴァーは、言いたいことがあるはずなのにそれをどう書いているのかからかなかった。

そこにガードナーから指針が与えられて、彼はとてもかくも小説が書けるようになっていく。その結果、作家でない普通の人の心を、作家になれるだろうかという懸念が、カーヴァーの作品の中に描かれ、おそらく教師のガードナーが想像もしなかったような、市井の人々の心を、精釈かつ簡潔な文章で淡々と描く、特異な存在の短編小説家が誕生したと言える。

この頃からカーヴァーはいくつかの大学の文芸誌、リトル・マガジンを中心に旺盛な創作活動を行うようになり、その中の何編かは全国誌や、年間優秀作品集にも掲載されるようになった。そしてまた彼は奨学金を得て、アイオワ・ライターズ・ワークショップで学んだ後、大学の講師として働くようになる。

そのようにして彼の名前は文学サークルの中では少しずつ広まっていったものの、彼の家庭生活は決して順風満帆とは言えないものだった。1960年代は彼にとってまさに苦難の修行時代であり、二人の子供を抱えた彼らの生活は厳しいもので、マリアンとの夫婦仲も波瀾を含んだものになって行った。

第二の恩人ゴードン・リッシュ（Gordon Lish）との出会いも1960年代の中盤に始まった。リッシュは、カーヴァーが編集者という、初めてホワイトカラーとして働いていた教科書販売会社の向かい側にある、教科書会社に勤めており、そこで二人は知り合う。それから、「エスクワイヤ」誌の小説部門の編集者になったリッシュは、カーヴァーの小説の原稿を掲載しようとするが、その時点では、まだカーヴァーの力不足のためリッシュのお眼鏡にかわらず、彼の短編小説の原稿をここごとく逆にせざるを得なかった。

しかしカーヴァーは、失望せず気を取り直し、敏腕編集者リッシュによる、短編小説の書き方指導のアドバイスを受け入れ、根気よく短編小説を書き続け、1971年まで採用してもらおうとする。それでも、彼が「隣人たち」という短編であり、この作品はカーヴァーが短編作家として世に出る第一歩となった。その後リッシュは「エスクワイヤ」誌を辞めてクノップ社の編集者と
なるのであるが、ここでもリッシュはカーヴァーの短編小説集の出版の契約をする。ゴードン・リッシュはカーヴァーの短編小説家としての才能をいち早く発掘し、認めた最初の人物と言える。

「ゴードンはいつも僕の作品の熱心な支持者で、どんな時に僕の作品を擁護してくれた。僕が書いていない時でも、僕がカリフォルニアにいて飲んでばかりいた時でも、ゴードンは僕の作品をラジオや作家会議などで朗読してくれた。ゴードンほど熱心で、しかも必要な時いてくれた支持者は、他にいなかった、と思う。励ましてくれたという意味では、ゴードンはガードナーに似ていた。」①とカーヴァーはシューマッハとのインタビューの中で述べている。

ゴードン・リッシュは、ガードナーと同様、文章的にも様々なアドバイス——50語費やさなくとも20語で何か言えるなら、20語で言う——をカーヴァーに与え、「マイマリスト・カーヴァー」の筆名手となり、ジョン・ガードナーと共に彼にとって文学の恩師であった。

Ⅲ 小説作法

ジョン・ガードナーとゴードン・リッシュとといえばの師によって、鍛え上げられたカーヴァーは彼独自の小説作法を確立していく。比較的短い詩、いわゆる自由詩型の短詩と短編小説のみを書き続けカーヴァーは、その形式の中に、今までの作家が描かなかったカーヴァーの方法で、普通の人々の日常の一こまを描いてみせる。

カーヴァーが体験し観察し、自らが熟知する世界を中心に、小説が成り立っているというところが、おのずからカーヴァーの描く小説を決定する。彼の小説形式においては、描かれる対象が拘束され限定されながら、悲惨な状況が波々と語られるのである。登場人物たちが交わす様々な会話にしても同じである。カーヴァーの登場人物たちは紋切り型の表現を多用する。それは人物の個性を際立たせるよりも、一見、人物をますます没個性的にしていくように見える。

だがカーヴァーは、登場人物に紋切り型の表現を語らせることや、その没個性を批判しているのではない。彼の作品の登場人物たちの紋切り型の言葉にも、いわば無個性の存在感ともいうべきものが感じられるのである。

さらに、都会のゆる大都市はカーヴァーの描く小説の世界からはおさまっている。彼らが描く場所は、名もない地方都市である。そればかりでない、都会が持つ人種的な軒轅や、ヴェトナム戦争、反戦運動、ウォーターゲート事件後のアメリカの政治的、社会的な変革のうねり、ほとんどのカーヴァーの小説に描かれるところではない。初期の時代にカーヴァーが好んで描いた情景は、どのようなものだったのだろうか。

ゴードン・リッシュによって、1971年に『エスカウイヤ』誌の6月号に掲載され、初期のカーヴァーの出世作となった「隣人」を見てみることにする。それまで純文学的な市場にのみ投稿していたカーヴァーであったが、この作品でカーヴァーは初めてスリック・マガジン（高級商業誌）のマーケットに食い込むことに成功し、さらに数多くのアンソロジーにも収められた。

「隣人たち」に登場する一組目のカップル、ビルとアイリーン・ミラー夫婦は幸せに暮らしている、どこにでもいる普通の夫婦である。しかし、口に出さないものの、二人はアパートの廊下を隔てた向かいに住む隣人のストーン夫婦の暮らしがりを何となくうらやましく思っている。彼らが、自分たちより一つ上のクラスの優雅な生活を送っているように感じられるのである。世間によくある「隣の芝生は青い」という感情を抱いている夫婦の物語である。

ある時、旅行に出ることになった隣人のストーン夫婦に留守中の猫と植木の世話を頼まれ、鍵を預かる。そしてビルとアイリーンはそれぞれに、誰もいいない隣家に入り浸るようになり、二人は常軌を逸した行動に出る。夫は猫に餌をやるとついて隣人のベッドに我が物顔に横たわり、ウィスキーを飲み、隣人の服を身につけ、隣人の家の冷蔵庫を漁る。
He opened the closet and selected a Hawaiian shirt. He looked until he found Bermudas, neatly pressed and hanging over a pair of brown twill slacks. He shed his own clothes and slipped into the shorts and the shirts. He looked in the mirror again. He went to the living room and poured himself a drink and sipped it on his back to the bedroom.  

「彼はクローゼットを開けてアロハシャツを選んだ。そしてきちんとアイロンをかけられてやや繊細な色づくろの上に吊っているパニューダーショーツを見つけた。彼は自分の服を脱ぎ捨て、そのシャツとショーツを着込んだ。そしてまた鏡の前に立った。それから居間に行ってグラスに酒を注ぎ、それをすすりながらベッドルームに戻ってきた」（村上春樹訳、これ以降特記無き限りは村上訳）。  

妻のアイリーンも夫と同じように、隣人の部屋に入り込み、勝手に引き出しを開けて隣人の写真を見たりする。二人とも時間を忘れるほど、他人の家にいることに快感を覚えるのである。それは他人のプライバシーを覗きたいという、ちょっとした好奇心で始めたことでありながら、だんだんさらにエスカレートし、深く抜き差ししない屈折した行為へと進展していく。そしてそれを続けることによって、二人はわけもなく性的に高揚し、廊下で抱き合う。他人の私生活を覗き見ることによって、うらやましく感じている隣人夫婦と自分たちを同一化し、快感を覚える屈折した夫婦の姿が描かれている。  

淡々とした簡潔な文章によって、奇妙で不気味な雰囲気を醸し出す作品である。ミラー夫婦の行動には随所に、おかし味さえ漂っているのだが、これはやはりカーヴァーの書いたものの中では、息の詰まる話の一つであり、寂寥感が漂う作品となっている。最後のシーンのビリとアイリーン夫婦の描写は、荒廃したラストシーンの多いカーヴァーの短編の中にあっても、人間の業を考えさせられる、奇詭な余韻が残る場面となっている。  

「隣人たち」を始め22編の短編を含む『隣から静かにしてくれ』は彼の処女短編集にしかかわらず、そこにははっきりとしたカーヴァーの「小説スタイル」が確立されている。もちろん後期の作品に比べて幾分荒削りだし、お決まりの試行錯誤も見受けられる。しかしその切り口は生々しく、天性の筆の勢いと生命的な輝が深まり、レイモンド・カーヴァーという作家の中に存在する確かな才能を明白に示している。そしてなによりもその「小説作法」はカーヴァー独自のものであった。  

この作品集は売れ行きこそは芳しいものではなかったが、全米図書賞の候補となって、カーヴァーは人々の注目を浴びるようになり、短編小説家の第一歩を踏み出していく。  

IV 「隣から静かにしてくれ」  

表題作である「隣から静かにしてくれ」（前妻マリアンに捧げられており、この作品の妻の名前も前妻と同じマリアンである）は、作品集の中では一番長い短編だが、見事に最後までテションを保っており、話し切実で面白く、読者をぐいぐい引っ張っていく力を持った、魅力的な小説である。  

いつものように何気ない会話を交わしていたはずの夫婦が、ふとした言葉の流れで、危険な領域へ思い込んでいく。夫婦の会話の描写は奇妙であり、短文の名手カーヴァーの面目躍如である。妻が不貞を犯したのではないかという夫の密かな疑念が、妻の言葉によってじわじわと拡大していく物語である。なぜか妻も、その疑念を肯定する方向へと言葉を選んでもしまう。すべては言葉の成せる技である。カーヴァーの巧みな筆致が、二人の会話のやり取りを通して、夫婦の心のひだを描き出していく。ついにたまらなくなってしまった家を飛び出した夫は、帰宅してから、妻が何を言おうと「お願いだから静かにしてくれないか」と耳をふさぎ閉じてみてしまう。  

カーヴァーにしては比較的長い作品だが、見事なテションを保ち、一気に圧倒的な迫力でエンドアップに読者を導くのは、三部構成の
レイモンド・カヴァー『願むから静かにしてくれ』に関する一考察

役割が大であるように思われる。[一部] はある点の疎らを除いては、子供も二人いてこの上もなく幸せなラルフ・ワイマン（高校教師）、マリアン（短大講師）夫妻の結婚の経緯が語られる。さらにこの作品で注目すべきことは、“Ralph and Marian Wyman are unusual characters, well educated and more capable of discussing their thoughts and feeling than the typical working-class Carver figure”とアーサー・ベシアが指摘しているように、カヴァーの作品の中では、珍しく意志の疎通が可能な、高学歴の中産階級の夫婦が描かれている点である。

一人の青年が大学に入学し、様々な青春期のクライシスを揺るぎ抜ける後に、めでたく同級生と結婚する。二人はとある地方都市で教師になり、家を買い子供を二人作る。ここまで順風満帆な人生である。そこには不安の影はなにもないように見える。アメリカン・ウェイ・ライフ（American way of life）の見事な典型といって差し支えないだろう。

しかし唯一、夫ラルフの心を晏させていた、何年か前のある夜のパーティーで妻が行った行動（妻が知り合いの男と少しの間はなくなったこと）に対する不信感が、夫の心を徐々に触しでいく。彼は妻を愛しているし、妻も自分を愛している。どこにも問題はない。だが、彼はその過去の一コマをどうしても忘れることができないのである。そしてある夜、彼はその話を持ち出す。そしてもうち前の話だから正直に言えば、妻に水を向ける。それで妻はふと、ついにこの口を滑らせてしまう。妻がそれに答えで語るうちに、ラルフは厳しく問いただし、次第に興奮していく、一方マリアンは語れない状態になるまで、話され疲労困憊する。やがてついに妻から真実（不貞）を聞いてしまった彼は、もうその重圧に耐えが出来ずに、そのまま家を飛び出して夜の街をあてもなく彷徨する。

[二部] では、激情に駆られてマリアンを殴ったラルフは家を飛び出し、夜の街を彷徨い歩く。バーで酒を飲みだり、ポーカーをやったりする。光る海を見たり、桟橋へ行く途中で一人の黒人に襲われ、町の裏街道で殴られる。

[三部] は、行き場所もないまま、明け方とほどと自宅へ戻る。家の中は静かで、子供が起きてくる。怪我をしている父親を見て大騒ぎしていると妻も起きてくる。トイレに戻って顔を洗って見ながら、考えているところへ、妻が慌てふためいた様子でドアをノックする。

ラルフは「願むから静かにしてくれないか」と妻に向かって言う。風呂に入った後ベッドにいるラルフの身体を、妻のマリアンが優しく摩ると、彼は巨大な眠りの中に落ちていくような気がするのである。ちょっとした弾みで長年の心のわだかまりを解き、すっかり胸を出し切り雨降って地固まるふうに、元の静に納まるところに、もしい増の夫婦の様子が描かれている。

結局、ラルフは家以外にほかに行く場所がない自分に気がつくのである。家という場所を離れてしまえば、彼は文字通りゼロになってしまうのである。完全に手話まり状態になってしまう。妻を許せないのか許すべきなのか（まにハムレット的内心と言える）。

He looked at himself in the mirror a long time. He made faces at himself. He tried many expressions. Then he gave it up. He turned away from the mirror and sat down on the edge of the bathtub, began unlacing his shoes. He sat there with a shoe in his hand and looked at the clipper ships making their way across the wide blue sea of the plastic shower curtain...... Then she said, “I have a nice breakfast on the stove for you, darling when you’re through with your bath. Ralph?” “Just be quiet, please,” he said.

「彼は長い間鏡の中の自分の顔を見ていた。彼は鏡に向かって顔をしかめて見せた。それからいろんな表情を浮かべてみた。でもやがてそれもやめた。彼は鏡の前を離れ、バックブの縁に膝を下ろし、靴の紐をほどきはじめた。彼は靴を手に持ち、そこに座ったまま、ビニールのシャワー・カーテンの広々とした青い海原を快走帆船が進んでいくのを見ていた。（中略）そ
して彼女は言った。「おいしい朝食を作って温めてあるのよ。お風呂から上がったら食べられるようにね」「静かにしてくれ、頼む」と彼は言った。

自分では決めることができないまま、彼はバス・ルームに閉じこもって、シャワー・カーテンの柄をじっと見ている男の姿は、情けないといえば全く情けない話で、昔昔の強いアメリカの時代であれば、こういう話はただの「女々しい」作品として片付けられただけにしかれない。

しかしカーヴァーの潔癖で、情け容赦のない、研ぎ澄まされた（hard-edged）筆致は、この男の弱さをどこまでも普遍化していいく。もしあながこの男の立場に立たされたら、あなたは一体どうするのか？あなたが果たしてこの男を笑える立場にあるのか、そんな資格があなたにはあるのか、と彼は訴えているようである。

どこにでもいる当たり前の、そして良心的に生きようと努力しているはずの人間が何かの弾みで、やはりどこにでもあるような人生の落とし穴に落ち込んで、にっこりもろろも行かなくなっている光景、それがカーヴァーの描く世界である。妻の不貞という問題も彼の小説に頻繁に登場するテーマの一つでもある。この作品は1967年度の『ベスト・アメリカン・ショート・ストリーズ』の一編に選ばれた。彼の作家としてのキャリアにとって、大きな転換点となった作品である。

Ⅴ ‘カーヴァー・カントリー’

カーヴァーの作品は内容から見て、ほとんどその物語は第二次大戦以降の、とりあえず現代と呼んでよさそうな時代を舞台としているのがわかる。だがそれは、全米の・世界的な歴史の流れからはぶんと切り離された、一種無時間とも言うべき時代の世界である。カーヴァーの描く空間も時間の場合と同じである。カーヴァーの登場人物たちは、より大きな空間から切り離された、孤立したスモール・タウンに、多くの場合は町外れに暮らしている。

それがレイモンド・カーヴァーの小説世界である。彼はその町に住んでいるだけであり、時間的にも空間的にもぼんと宙吊りにされた共同体の、そこに住む個人である。多くの場合その個人は、共同体となんら有機的な結びつきをもってはいない。社会の中に放り出された、どこにでもいる普通の人間をカーヴァーは描き続けたのである。

カーヴァーの作中人物たちは、職にあぶれ、その月の家賃をどうやって払うかも定かでないアパートに閉じこもって、結果的には他者に近づくというよりは近づき得ないとの確認に終わることの多い会話を交わし、すでに崩壊してしまった人間（夫婦・恋人・友人・家族など）の関係を修復しようと空しく試み、アルコール依存症を直そうと苦労する。多くの場合、失敗に終わり悲惨という他ならない状況である。

典型的な「初期カーヴァーの世界」の一つと思われる「ナイト・スクール」を見つめることにする。この作品は『ノース・アメリカン・レビュー』(1971年秋号)に発表された。これもカーヴァーの「情けない男の話」のジャンルにも入れることができるだろう。文章の質感も軽く、コミカルである。この短編はおそらく多くの笑いを誘っているに違いない。しかし笑った後で、ふっと寂しさがよぎる。読者はそこに荒れた光景を見るからである。どこか手をつけなければいいのか見当もつかないくらい荒れた（bleak）光景を。

最初の簡潔な数行の中に「カーヴァーの世界」が完璧に提示されている。

My marriage had just fallen apart, I couldn’t find a job. I had another girl. But she wasn’t in town. So I was at a bar having a glass of beer, and two women were sitting a few stools down, and one of them began to talk to me.101

この失業している青年は妻にも逃げられていた。仕事もない。お金がなくて、大学にも通いきれない。仕方なく両親と同居しているが、両親だってお金がない。地下の狭くてさえないアパートに住んでいる。父親は体が不自由な上に
レイモンド・カーヴァー『願むから静かにしてくれ』に関する一考察

見舞金を使いきってしまったり、母親は深夜レストランでウェイトレスをやっている。主人公の男は取り巻く環境は、これ以上ないくらい悲けなく、悲惨な状況である。

この悲惨さを浮き彫りにするために、カーヴァーの視点は一番近いところから始まり、主人公の悲惨な状況を淡々と描いていく。例えば、月の前にある一杯のビールから始まる。それを注文する時のなけなしの小銭の感触から始まる。もう一杯飲みたいと思う、しかしこお金がない。そういう頂きから始まる。カーヴァーは小説の登場人物たちに、そういった即物的な事象にしっかりしみみつかせ、彼らの切羽詰まった生活感を増幅させることに成功している。

しかし、そこに主人公の男とはほんのすこし違った生活環境にある人々が、彼の感情の中に侵入していく。バーでカルチャー・センターに通っている妙なおばさん二人組に声をかけられ、ビールをおごってもらい、これから一緒にバターシオンという教師のところへ押しかけようと誘われる。どうして自分がそんなところへ行くかなんてわからないのかもしれません。バターシオン氏はこの二人の中年の生徒にどんな弱みを握られているのか？主人公の青年はそんなことにはまるで興味がない。しかし、だからといって彼女たちの誘いを断る理由も見当たらないでいる優柔不断の男である。

自分とちょっと違った暮らしの主たち、つまり異界の介入といえども、彼自身と同じくらい即物的である。しかし彼の即物性と中年の女性たちの即物性とは少し違うライン上にあるように思われる。だからぜんぜん嘘込み合わない。この嘘込み合わされば、いわゆる「不合理」というのとはちょっと違う。「不合理」というのは人にある種の価値の転換を迫るのであり、少なくとも価値の見直しを迫るものである。

しかしカーヴァーの世界のそれは、初めからそんなことは期待してはない。それはただ単に嘘込み合わないだけのことなのだ。そこには解決もなく、カタルシスもない。それは絶望の例証をもうひとつ付加するだけのことなのである。カーヴァーの小説のおかしさはたぶんその辺にあるのだろうと思う。そして救いのないハードな感情の余韻を残し、ブリーチネス（bleakness）の中でこの作品もまた帰結する。まさしく「カーヴァー・カントリー」である。

「60エーカー」（“Sixty Acres”，1969）はこれまでのものとはいささか傾向を異にしてハードな作品であり、まるでカーヴァーも愛読したヘミングウェイの初期の短編を思わせるような、簡潔でシャープな世界であり文体であるが、この作品もまさしく「カーヴァー・カントリー」そのものである。

北国のインディアン居留地。空には重い雲が垂れ込み、地表には雪が積もって凍りつつき、男たちはコートを着立て、顔を伏せて歩いている。「人々は貧しく、傷ついている。挫折があり、暴力の予感がある」こういった光景はカーヴァーが好んで用いる背景だが、全体的な味わいからすれば、寂の誇る短編小説である。完成度も高く、懺げられた人々に注ぐカーヴァーの温かな目が印象的な作品である。

1972年に『エスクリア』誌に発表された「何か用かい？」（"What is it?"）もカーヴァーの小説によく登場する「不貞」と「破壊」という二大テーマが並列し、しかも「憎けない男シリーズ」にも入れられるという、もうカーヴァーでなくては書けない「カーヴァー・カントリー」の世界である。ここでもまたワーキング・クラス家庭の没落の過程がリアルに描かれている。主人公の夫婦の生き方も相当だらないものだが、アメリカン・ドリームの崩壊の一つの光景であるといって良いだろう。こういった情景はそれまでアメリカ文学においてほとんど描かれてなかったものだし、そういう意味で、カーヴァーの描く「カーヴァー・カントリー」はまさしくカーヴァーのオリジナルであった。

おわりに

生活苦という逆境の中で、短編小説を書くことに生きがいを見つけて、カーヴァーにとって初めての短編集となる『願むから静かにしてくれ』には表題作をはじめ、前述したように、恩
師の一一人グォン・リッシュによって推薦され
出世作となった「隠人」や、「ナイト・スケー
ル」、「60エイカーズ」、「何か用か？」など22
編が収録されている。

大学の創作教室で出会った、もう一人の恩師
ジョン・ガードナー仕込みの、簡潔で、シャー
プな文体でつづられた短い作品の中には、いろ
んなことが次々に起こり、人々は失業しており、
貧しく、結婚も破綻している。‘カーヴァー・
カントリー’である。しかし、それらはどれ一
つとして理由は説明もされず、解決もされない。
それはそれとして、そこに存在するだけである。
そして主人公たちは傷ついており、他人のブライ
バシーを酷く侵害したり、不可解で奇妙な行動
に走ったりする。

表題作「願うから静かにしてくれ」の主人公
ワイマン夫婦は、前述したようにカーヴァーの
作品には確かに中産階級の夫婦の物語だが、テー
マはカーヴァー特有の、心ならずも困った状況
（妻に対する不貞疑惑）を抱えていた普通の人々の乱れを、見事な緊張感を保ち
ながら、シンプルな研ぎ澄まされた筆致で、細
部にいたるまで実にくっきりと浮き彫りにして
いる。カーヴァーの物語は、普通の人々の生活
を、平明な言葉を使って書くからこそ面白く、
また意味もある。余計な修飾や、思わぬような
感情移入のない、潔いまでにノーサン・フリルの文
章の味を堪能することが読者の役目であると思
われる。前述のこの短編集は、まさに「ミニ
マリスト・カーヴァー」の称号を裏切らない。

1970年代の多くの批評家は、そのような人々
の平凡な生活が文学に取り上げられたことに驚
嘆したが、筆者については驚嘆であるとカーヴァーは考えていただ
に違いない。なぜそんなことにいちいち驚かなか
くてはいけないのか、アメリカ社会の大半を
構成しているのはそのようなごく普通の人々で
はないのか、と。カーヴァーはそうした普通の人
間のありきたりの日常の中で、ふとしたこと
で亀裂が走ったり、落とし穴に落ちたりする、
捉えがたい精神的空白を感じる瞬間を描いてい
る。精神的空白、また何らかの不安感、喪失感、
それは、ただ感じる事しかできないだけで、理性
的には捉えることはできないものであり、どう
することもできないものの、つまり、「不合理」
なものである。

カーヴァーは、彼の独自な小説作法で、作家
として円熟期に入る前後の時代に、この処
女短編集の中で、普通の人々の失業による経済
的困窮、結婚の破綻、夫婦間の精神的すれ、様々
な人生の落とし穴など、日常生活の中の喪失感、
不安感をテーマとして描き追い求めたと言え
る。

1970年代を浸す、市井の人々の喪失感、不安
感を描くために、カーヴァーの方法が最良であ
ったというつもりはない、そもそも、全世界
またはアメリカの歴史的な流れから切り離され
た背景の中で描かれた、カーヴァーの小説が、
時代の空気を捉えることを目的としていたと考え
える根拠もありはない。だが、結果としてレ
イモンド・カーヴァーの文学が、1970年代の随
所に感じられた、普通の人々の虚脱感、無力感
の最良の表現方法の一つになっていることは疑
い得ないように思われる。

Notes

1）Fires p.34を参照。
2）同上 p.34-35を参照。
3）同上 p.38を参照。
4）同上 p.38を参照。
5）同上 p.37を参照。
6）「塔のあと、塔の中へ——カーヴァーとのインタビュー」p.79を参照。
7）“Neighbors”p.13を参照。
8）Technique and Sensibility in the Fiction and
Poetry of Raymond Carver p.51を参照。
9）“Will You Please Be Quiet, Please?” p.250-
251を参照。
10）“Night School”p.94を参照。

Works Cited and Consulted

Bethea, Arthur F. Technique and Sensibility in the
レイモンド・カーヴァー『頼むから静かにしてくれ』に関する一考察


有賀夏紀『アメリカの20世紀(下)』、中公新書、2002。

片岡義男(他)『ユリカ』、青土社、1987。
(変貌するアメリカ文学)

シューマッハー、マイクル(杉浦悦子訳)『端のあと、端の中へ 〜カーヴァーとのインタビュー』『ユリカ』、青土社、1990。(レイモンド・カーヴァー)

カーヴァー、レイモンド(村上春樹訳)『ファイアズ (炎)』、中央公論社、1992。

The Complete Works of Raymond Carver 1.